

国内現地研究会 2008★岩見沢+砂川企画（活動記録）

企画■中心市街地の再生を考える ～岩見沢複合駅舎と砂川スイートロードの試み
（都市と住宅を考える会国内現地研究会+teku-teku 共同企画）

日時■2009年6月6日（土）午後～7日（日）夕刻

コース■6日：岩見沢複合駅舎とまちなか再生

岩見沢駅+複合駅舎・駅前広場・自由通路（見学）～コミュニティプラザ（全体説明）
～中心市街地（4・3地区再開発アーバンビレッジ+はまなすストリートギャラリー）
～いわみざわ公園バラ園～旧朝日駅舎+保存SL～メープルロッジ（討論、宿泊）

■7日：砂川駅周辺とスイートロード

砂川駅+自由通路・地域交流プラザゆう（見学、全体説明）～中心市街地（市立病院建設現場、
バスターミナル跡地等）～スイートロード北菓楼<昼食>～ソメスサドル～砂川駅

■7日オプション：アルテピアッツァ美唄

講師■坂内伸一氏（岩見沢市経済部次長）+田伏清巳氏（砂川市経済部商工労働観光課長）ほか

参加者■◎鈴木栄基+梶川義実、大竹 亮、小川美由紀、洪 正徳、重永真理子、高見沢邦郎、
二瓶正史、古里 実、連 健夫、横田宣明、辻 泰弘*、鳴海拓史*（*岩見沢のみ参加）
（以上13名、敬称略、◎コーディネーター）

企画主旨■

今回は、産炭地域として発展し、炭鉱の衰退とともに人口減に見舞われている北海道空知地方を訪問し、中心市街地の再生を考えます。中心都市である岩見沢市は、周辺の人口が激減する中でも人口を維持し、中心性を保っているものの、中心市街地は他の都市と同様に厳しい状況です。鉄道のまちとして発展してきた岩見沢では、今春、市とJRの駅舎再建プロジェクトにより、デザインコンペ&市民参加を経たすばらしい複合駅舎が竣工しました。駅舎を見て街を歩き、「まちづくりと産業」について議論します。

また、翌日は「すながわスイートロード」として注目されている砂川市を訪問します。お菓子のまちづくりを実体験するとともに、手作りの中心市街地活性化計画の狙いや、まちの歴史を活かした新しい産業づくりの模様を学び、砂川のチャレンジについて討議します。

なかなか行く機会のない空知地方の2都市ですので、この機会にぜひどうぞ！



完成した岩見沢複合駅舎を見学する



砂川スイートロードをじっくり味わう

参加レポート1 ■ 岩見沢複合駅舎とまちづくり

●新しい時代の地域再生のための施策

岩見沢は、もともとは土族入植の農地開拓地であったが、北海道の産炭地域であった空知地方（札幌と旭川の間地域で、夕張、岩見沢、砂川などがある）の交通の要衝として炭鉱勤労者が住む町として発達した。他の産炭地域の都市と異なり、石炭産業が衰退した現在でも周辺町村からの流入があり、人口は増加している。しかし、産業構造の変化による経済の衰退と商業が多かった中心街の空洞化は深刻で、市は地域再生のための市街地の振興策や活性化を試みている。今回の岩見沢訪問は、当会会員でもある鈴木栄基氏が岩見沢市で直接関わられた駅舎の建設をはじめ、このような地域活性化の試みを視察しようというものであった。

●コミュニティ拠点としての駅の再生

電車で岩見沢駅に着いた瞬間から、この駅舎がただならぬ建築のレベルであることは、一目瞭然であった。目地まで使い分けた杉板型枠の美しい打ち放しと煉瓦の壁とPCの梁、内装は暖かみがありディテールもきめ細かく、普通の駅舎建築の大雑把なところが一つもない。フローリングなど住宅並みのインテリアは、公共的な使用に耐えられるか逆に心配なほどである。今回は春であったが、次回は真冬に来てみたい。おそらく北欧の建築のように、厳しい外部から逃れた人が内部で寛いでいるのであろう。建物の一階部分にいくつか店舗や市民利用の施設が組み込まれているが、それが外部からの直接の出入りではなく、内部廊下からの利用であることが最初不思議に感じられたが、冬の利用を考えれば当然であろう。建物の内部に界限性のあるまちを作ろうとしているのであろう。これなら、雪国の街の心地良い市民の拠点になるであろうことが想像できた。

写真を撮りながら駅舎を見学していると、階段を自転車を引きいた高校生たちが大挙して降りて来た。どうやら自由通路を自転車で渡って来たようである。なるほど先ほど駅舎に組み込まれるように設けられた自転車置場を見たが、この駅舎は人だけでなく自転車での利用も考えているのだと解った。それが解ると、なぜ通常より階段の勾配が緩いのかとか、階段の横に斜路がある（後から気がついたが、階段の脇に自転車用のエスカレータが付いているところもあった）ことの謎が解けた。連絡通路が十分に広くて気持ち良いのも、多様に使える街路のようにしたいだけでなく、自転車が通るからであろう。駅舎中心部分の人間が使い通常の階高と自転車利用部分の階高が違い、それが建物のレベル差の処理や仕上げの違いに表現されていて、実に見事な構成になっている。

ファサードのマリオン（方立）は古いレールを使用している。レールはシャープで美しく、それだけでミースみたいに綺麗だと見とれていたら、昔鉄道少年だった梶川さんが来て「一つ一つのレールに刻印があるでしょう。ロールマークといって、製造者や製造年月日などがわかるんですよ」と教えてくれた。イギリスやアメリカのメーカーの名が見られ、そのほとんどは明治が始まって間もない19世紀のものであった。1901年以降造られた国内のものもあり、中には2601年というものもあり、混乱していると、梶川さんが戦争中の皇紀表示だと教えてくれた。駅がまさにレール博物館というわけだ。

この駅は大々的な設計競技（JRグループ初の公開設計コンペ）を経て建てられたが、出来上がった建築は北欧の公共建築のように長く市民に愛される水準に達していると思った。さらに重要なことは、この駅は



厳しい冬に備えた複合駅舎の内部空間



主要道路からの軸線を受け止める長大空間



幅広い自由通路で子供たちも大喜び



自由通路の先にある煉瓦造のレールセンター

駅前に広がる市民広場、駅と対をなして先行して建てられた市民ホールと一体となって、市民の日常的な利用やイベント時の拠点としても複合的に機能するエリアを形成していることである。このエリアは鉄道と並行に東西に長く、グリッド状に形成されている岩見沢の街の多くの道路のアイストップになっている。このアーバンデザインが、この新しい時代の市民の拠点を街と一体的なものにしていると感じた。さらに、鉄道の北側、自由通路を渡った先には、レールセンターとして現在使われている煉瓦造の歴史的建造物があり、将来このような建物を取り入れ、市民や観光客のために活用すれば、この駅を中心とした新しい時代の拠点の可能性はさらに広がるであろう。

●ICT施策と関連情報施設によるネットワーク

岩見沢市では、ICT (Information and Communication Technology) 施策を進めている。それは住民生活の質的向上と地域経済の活性化を図ろうというものであるが、市営の高速光ファイバー網によるインフラ整備や中心施設である岩見沢市自治体ネットワークセンターを基幹構造に、まちなかにインキュベーション施設、ビジネスセンター、オフィスなどをつくっている。IT関連企業も着実に活動を展開し始めている。また、ITサービスは教育、医療、福祉、市民などあらゆる分野において展開の可能性があるが、雪国の厳しい冬を考えると、北欧諸国においてITが有効に活用されているように、岩見沢市においても、市民生活の中に十分浸透することを期待したい。

●中心市街地活性化の試み

岩見沢市では、衰退した中心市街地の空き地や空き店舗を利用して多くの事業が推進されており、それらのいくつかの成果を、実際に町を散策して視察した。デパート跡地の朝市のできる交流広場や、ポケットパークのような町中ミュージアムなどの印象的な事業も興味深かったが、特にユニークな試みは「アーバンビレッジ岩見沢」という、音楽スタジオと学生向け賃貸マンションとシルバー人材センターの複合ビルを、特定目的会社をつくり建設したものであった。これは、音・美・体教育の北海道大学岩見沢分校があるこの地域の特色を生かした事業であり、このような若者やサブカルチャー支援の事業は、従来の中心市街地活性化にはあまり見られなかったもので、新鮮であった。しかし残念なことに、この事業での建築の計画や周辺との関係は、駅舎とその周辺のように優れた解決がなされていなかった。隣接地に大変魅力的な古くからの個店商店市場やコミュニティが残っており、そのようなものとの連動性があれば、複合的機能やオープンスペースのデザインなども、もっと魅力的なものになったと思えた。(岩見沢記録：二瓶正史)



活性化を模索する岩見沢駅前の商店街



中心市街地のアーバンビレッジ岩見沢



万字線廃線後に保存された旧朝日駅舎とSL



岩見沢市郊外のメープルロッジ

参加レポート2 ■ 砂川市におけるダイナミックな取組み

●現地研究の2日目は、砂川市での中心市街地活性化の取組みである。あいにくの雨模様の中、岩見沢市内の宿泊ロジからバスで岩見沢駅に向かい、快速電車により砂川市へと移動する。

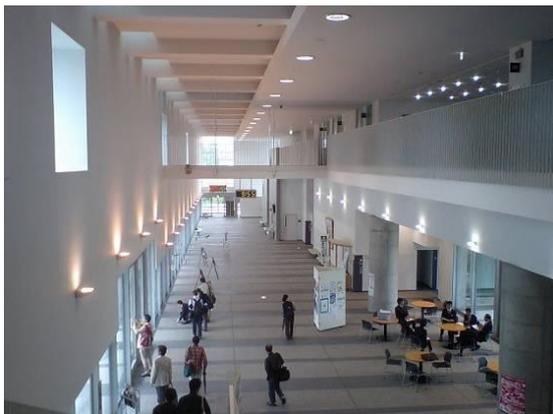
●砂川市の発展は、北海道開拓史の礎となった札幌―旭川上川国道（現国道12号）の開削（囚人約500人を使ったとされる）に始まる。その後、日本のエネルギー需要を支えた空知産炭地域からの石炭運搬のため、岩見沢～砂川間、砂川～歌志内間に鉄道が開設し、「砂川駅」が設置されて交通の要衝となった。道庁が鉄道工事に前後して砂川付近の土地区画測量を行い農民に貸し付け、これにより農民が入植。市街地には商店、飲食店が増加するなど栄え、これらが今日の中心市街地となる。戦後は、1946（昭和21）年に東洋高圧北海道工業所が建設され家族も含め1万人が工場近辺に居住するなど、工場の町としても発展を遂げる。1958（昭和33）年には市制が施行され、翌年には32,495人と市制開始後のピークに達するものの、石炭産業の衰退等の影響を受け人口減少が続くことになる。今日の地方都市のある種の典型的状況に置かれている。

●こうした状況に対して市は、砂川駅周辺に市の都市機能の集積を図る取組みを進めている。駅の自由通路整備と一体となった地域交流センター整備や市営住宅の建設、さらには地域の拠点病院の建替え等である。この他、駅近くには地元住民たちが誘致したホテルが立ち、バスターミナル跡地にも現在優良建築等整備事業によりドラッグストアが併設される住宅が建設されているなど、北海道ならではの開拓魂の息づくような動きが見られる。

●これらの動きを下支えするのが、2007年8月27日内閣総理大臣の認定を受けた改正中心市街地活性化法に基づく基本計画（職員による手作り！）である。この中で、市の発展軸でもある国道12号を中心に9つの菓子店が広がることに因み、ここを「砂川スイートロード」と名づけ、お菓子が美味しい「スイート」な魅力を持つまちという都市情報発信戦略も展開し、生き残りを目指している。

●これらの取組みには、「自分達のまちは、自分達で何とかしなければ」という思いが感じられる。地方都市にあって、地元に来てもらうということがいかに大変なことであり、そのためにはどんな資源でも活用するという姿勢が東京近郊の地域よりも強い。そして、全体をリードする田伏氏達の取組みも行政でありながら、どこか生活に根ざした活動との印象を強く受けた。こうした人々の思いも併せて砂川市での取組みは、意外にも、とてもダイナミックなのであった。

（砂川記録：洪 正徳）



砂川駅に直結する地域交流プラザゆう



地域を愛する行政マン田伏課長の話を聞く



住民や観光客で賑わうスイートロードの北菓楼



馬具・革製品ソメスサドルの牧場とショップ

参加レポート3 ■ アルテピアッツァ美唄 (オプション)

砂川訪問が終わった2日目の15時頃、札幌へ向かう電車の中で、二瓶さんから「せっかくなので、アルテピアッツァ美唄へ寄ろう」という声上がり、賛同した4人は美唄で途中下車し、タクシーで現地へ向かった(バスでのアクセスも可能)。

●廃校を再利用したアルテピアッツァ美唄

旧炭住地区の統廃合された小学校をアートスペースに再利用している施設である。有数の産炭地域のひとつであった美唄市でも、1973年までにすべての炭鉱が閉鎖され、この小学校(旧栄小学校)も廃校となっていた。そこに美唄出身でイタリア在住の彫刻家・安田侃が着目し、関係者の努力により1992年に彫刻公園として生まれ変わった。当初は、校庭と体育館を利用し、その後木造校舎にも拡充、さらにカフェやスタジオも増設しており、現在はNPO法人が指定管理者となって運営している。2002年建築分野の村野藤吾賞受賞、2010年地域づくり総務大臣表彰受賞。<http://www.artepiazza.jp/>

●卓抜の空間センスがもたらす至福のひととき

廃校を利用した施設は最近各地に増えているが、従前の空間と転用後の用途の関係にどうも無理があると感じることが多い。しかし、ここでは、従前の空間特性が見事に活かされていた。小山を背にした広い校庭と北海道らしい端正な木造校舎の持ち味を活かした上で、彫刻空間に転換している。それは、従前の小学校の自然環境や建物水準の良さによるものでもあろうし、同時に、彫刻家の卓抜な空間センスによるものでもあろう。入口の小山から全体を眺め、広い校庭を歩き、懐かしい木造校舎に入り、裏庭の林を散策し、スタジオ(工房)を覗き、カフェで休憩する・・・すべてが心地よく癒されるひとときである。

●建築とアートの持つ力によるまちづくり

かつて小学校であったことを意識してか、ここでは子供を対象としたイベントを積極的に実施している。また、併設の幼稚園は現在も開園しており、完全な廃校とは異なる微妙な臨場感を残している。廃校というマイナス要素を、こんなにもすばらしくよみがえらせている建築とアートの力はすごいと再認識した。

(美唄記録：大竹 亮)



アルテピアッツァ美唄 (校舎と校庭)



アルテピアッツァ美唄 (校舎内部)

参加レポート4 ■ 今後のまちづくりに向けての所感

岩見沢、砂川ともに私にとって3回目の訪問ですが、いずれも20~30年前のことですので、その後の状況がとても気になっておりました。今回、再訪してまちづくりを議論する機会を持つことができ、多くのことを考えました。以下、項目別に略記します。

①岩見沢の産業とまちづくりへの感想と提案

新産業振興に力を入れ、駅舎の多機能化や中心街居住を推進している点が評価できました。商業活性化は直ちには難しいでしょうが、居住と福祉の再開発が成功した事例は心強く、札幌に近いという立地を活かして続編を期待したいところです。再び人が集まってくれば、商業面でも、また諸活動が始まるでしょう。

②岩見沢の駅舎、自由通路への評価と今後の活用

すばらしい駅舎でした。複合的な機能、美しいデザイン、広場や自由通路などによって、まちづくりへの展開を予感させます。街の玄関口として、多くの来訪者を迎え、住民たちを送り出す駅舎が、こんなにも充実しているとは、うらやましい限りです。市役所とJRの協力関係にエールを送ります。次は、駅裏手の煉

瓦倉庫の保存活用をぜひ。

③砂川の産業とまちづくりへの感想と提案

人口規模が小さく、中心街の活性化策が見つけないところですが、スイートロードというテーマを立ち上げ、民間事業者が主体になって取り組んでいました。北菓楼やソメスサドルなど、本物の老舗が頑張っていました。駅に直結した市民施設（交流プラザゆう）も、内容・空間ともに充実していたと思います。今後、市民活動の力を伸ばし、さらに活かすことが期待されます。

④今回訪れた場所で印象に残ったところ

岩見沢複合駅舎★駅舎を公開コンペで設計したのは画期的。煉瓦もサッシュも美しい。
岩見沢駅裏手の煉瓦倉庫★貴重な産業遺産であるとともに、駅周辺活性化の資源になりうる存在。
岩見沢4・3地区再開発★若い人を街に呼び戻すことに成功している。アート広場もいい。
万字線鉄道公園★廃線後の旧朝日駅舎と蒸気機関車が残し、かつての土地の記憶を伝えている。
メープルロッジ★大自然の中、木のぬくもりが感じられ、合宿場にふさわしかった。
砂川地域交流センターゆう★砂川駅自由通路と直結し、上砂川支線の記憶を残している。
砂川スイートロード北菓楼★とてもにぎわっていった、ランチもデザートもおいしかった。
砂川ソメスサドル★本物の技術と伝統に裏打ちされた商品が並んでいた。
アルテピアッツァ美唄（オブション）★廃校を利用し、すばらしいアートスペースになっていた。

⑤両都市を訪問して、新たにわかったこと、発見したこと

北海道の旧産炭地域にある2つの都市を訪問しましたが、それぞれ商業都市、工業都市からの脱皮に悩んでいるようでした。商業活性化の時代は終わりましたが、市民生活の質（quality of life）に着目して中心街に人を呼び戻そうという試みは、まだ途上です。しかし、岩見沢の複合駅舎と4・3再開発、砂川の地域交流センターと市民病院整備は、いずれも、中心街に住み、活動してもらおうという方向です。郊外から中心街へという明確な方針が示されていることを心強く感じました。

⑥他都市の参考になると思った施策

岩見沢複合駅舎★市とJRが協力すれば、こんなにもすばらしい用途、機能、デザインになる。特に、公開設計コンペをやったことは賞賛に値する。
砂川地域交流センターゆう★駅前に自由通路と直結して市民のための多様な活動施設が出来た。今後、人が集まる効果を期待できる。
アルテピアッツァ美唄★廃校というマイナス要素を、こんなにもすばらしくよみがえらせている。建築とアートの持つ力はすごいと再認識した。

⑦その他今回の企画について

岩見沢も、砂川も、仕事とプライベートで2回ずつ訪れたことがあるのですが、もう20~30年も前のことです。久しぶりに来訪し、厳しい環境ながら、すばらしい複合駅舎や魅力的なスイートロードなど、着実な試みが進められていて好感が持てました。「伝統にとらわれない強い郷土愛」が北海道の持ち味だと思いますし、その良さが様々なところで見いだせました。とても充実した2日間でした。鈴木さん、本当にありがとうございました。（担当：大竹 亮）



岩見沢複合駅舎は、街と外部の結節点



アルテピアッツァ美唄に流れる静かな時間

実施レポート■岩見沢・砂川企画（都市と住宅を考える会国内現地研究会）を開催して

2008年度の国内現地研究会は、年度を越えて2009年6月に実施した。訪問先は、北海道空知地方の岩見沢市及び砂川市である。岩見沢市では鈴木栄基会員が活躍しており、すばらしい複合駅舎計画が進捗しているとの情報があった。当会としても北海道は初めてであり、その竣工を待って実施することとなった。

情報を集めると、隣の砂川市は病院とお菓子のまちづくりをしているという。両市とも産炭地域を背後に抱えて中心市街地活性化にも取り組んでおり、夏の講演会のテーマ「まちづくりと産業」を現地で研究するには適している。当初、1月の厳寒期に実施を予定した。冬こそ北海道であり、道内でも名うての豪雪地帯である岩見沢市の年間平均降雪量788.8cm(!)。これを抜きには語れないであろう。しかし、岩見沢複合駅舎の全体の竣工が2009年3月なので、前述のように6月とした。

また、両市とも著名な観光地ではないので、今回の現地研究参加者のほとんどは初めての訪問であった。

■第1日目、岩見沢

●岩見沢駅と中心市街地活性化計画

岩見沢市は人口9万人であり、道都札幌から特急電車で23分、普通電車でも38分の距離である。20年近く大きな人口変動はないが、中心部では人口が減少し高齢化率が高まっている。他の地方都市と同様、自動車がなくて生活しにくい都市であり、開拓時代から基盤も整備されていることもあって「バイパス沿いの大型店」に流出している状況である。中心商店街は営業していない店も多く、自動車交通量も歩行者も少ない。

中心市街地活性化基本計画では、自動車が運転できなくなってきた高齢者がまちなかに居住でき、地域の中心であった交流の拠点機能を活かし、新たな産業を振興することが目標として掲げられている。交流拠点としての機能を担うのが、岩見沢駅複合駅舎である。整備の経緯は会報132~133号に記載されているとおりである。このほか、まちなか居住のため、特定目的会社を造って中心部に賃貸住宅を整備したり、新産業を創出するために新産業支援センター、ITビジネスセンターを整備したりしている。このように書くとハコものばかりと思われるが、勝算のあるハコを造り、少なくとも今現在、有効に機能している。「都心部に住んで電車で札幌に通い、週末は車に乗って郊外店で買い物」というパターンもありそうな状況だ。

岩見沢駅について記そう。1882年に開業した歴史があり空知地方の中心となる駅で、周辺の炭坑からの石炭が集まる駅であった。機関区やレールセンターがある鉄道の街でもあった。ちなみに、大宮の鉄道博物館に展示されている057135は、岩見沢機関区の所属であった。4代目の駅舎建設にあたり、岩見沢市とJR北海道はデザインコンペを実施することとし、最優秀賞を受賞した作品が古レールと赤レンガを大胆に使った今の駅舎である。なにがどうすばらしいかは、現地に行ってみてもらうしかない。古レールコレクターは是非行くべきである。デザインコンペの経緯や作品集は『まち再生への挑戦』としてJR北海道から発売されている。

●産炭地域の歴史を感じる

宿泊先はかつての炭礦地区にあるメイプルロッジであった。廃線になった国鉄万字線の駅舎などを訪問しながら、宿泊先に着いたのち、1時間、鈴木さんによる空知地方の歴史と現在について追加説明があった。多数のスライドが用意され、その内容に空腹も忘れてしまった。最盛期と現在とを比べ、驚くことが多かったが、その典型は夕張市の都市計画図であろう。一見すると不思議なことに、山の中に飛び飛びに都市計画区域が設定されている。これは、そこに炭礦を中心とした街があったからである。夕食の後、夜半まで「都市と住宅を考える夜」が開催されたことは言うまでもない。翌朝は、炭住を巡って、砂川に向かった。



レールを組み合わせた壁面のオブジェ（岩見沢）



上砂川支線を記憶するモニュメント（砂川）

■第2日目、砂川

●砂川の中心市街地活性化計画

砂川市は人口2万人、札幌から特急電車で44分の都市である。かつては東洋一といわれた化学肥料の工場があり、最盛期にはこの工場だけで家族を含め1万人が生活していた。また、岩見沢同様、近隣市町から掘り出される石炭の集散地でもあった。肥料工場も大幅縮小、石炭はゼロとなり、人口は2万人であるが、市制施行の昭和33年でも3万人だったことを考えると、善戦している。

3万人の中心市街地であるので、それほど大きい市街地ではないが、かつての集客圏は人口をはるかに上回るものだったであろう。中心市街地活性化計画の目標は、賑わい創出+まちなか居住による商店街活性化である。「砂川物語」として計画が進められているが、その象徴が砂川駅に直結して整備された「地域交流センターゆう」であり、建て替え工事が進められている砂川市立病院である。交流センターは年間8万人が利用しており、我々が訪問した当日も、かなりの稼働率であった。

市立病院は他の自治体の病院とは異なり、黒字である。年間の患者は40万人にも達し、地域の中核的医療機関として機能している。職員も移動がなく、病院のプロが病院を経営している状況である。現在の病院の隣接地に建設される病棟は506床（因みに、北大病院は936床）であり、いかに規模が大きいかかわかる。病院に隣接し、医療関連サービス産業の集積が進んでいる。40万人の集客機能は大きいのである。

●お菓子で花咲く”まち物語”すながわスイーツロード

何かないかと探したら、砂川に9軒の菓子屋があり、それぞれ元気だった。これは資源だと市の職員は考え、行動を起こしたのが「すながわスイーツロード事業」である。砂川市を南北に貫く国道12号線は日本一長い直線道路であり、その沿道に9軒の菓子屋が並んでいる。と言っても北海道のこと、歩く距離ではない。市では「すながわスイーツロード協議会」をつくり事業を行っているがすべてソフト事業であり、市内外の消費者に親しみ楽しんでもらう事業を行っている。協議会の中では青年会議所や商工会議所青年部の活動が活発であり、ちょうど小中学生の親世代である。将来につながる気がする。今や札幌からのバスツアーが年間20回もあるそうである。我々が昼食を摂った北菓楼はとても居心地が良く、時間を忘れてしまった。

■最後に

今回の充実したプログラムの設定は、岩見沢市の鈴木会員の事前の準備によるところが大です。最後になりますが、休日にもかかわらずご講演いただいた岩見沢市経済部坂内次長、同商工観光課永主幹、砂川市商工労働観光課田伏課長、メープルロッジに差し入れしていただいた北海道庁辻次長に感謝の意を表します。楽しく、美味しく勉強になる2日間でした。（事業部会長 梶川義実）



万字線旧朝日駅舎に保存されたSLの前にて
（一番喜んでるのは誰？）



レールセンター内で開催された岩見沢鉄道EXPO2012の
トークセッション（左から2人目に梶川氏が参加）

※参加レポート1～2は、TMU都市と住宅を考える会会報135～136号より転載し、
また、実施レポートは、同会年報2009より転載し、写真を追加したものです。